



ドゥーチェの汚仕置き
～匂いだら臭かった～



「最近 私達が訓練中に誰もいない準備室へ侵入して悪さをしているヤツがいるヨトは分かっていたが……」
「お前か いつも私達の制服やタイツを臭い汚汁でぬるベトにしていた犯人は」
「にしても……捕まえてみれば……」

「まさか 我が校にこんな可愛らしい男の娘が紛れ込んでいたとはな」
「その見た目をイイことに 女子生徒に紛れて男の欲望を満たしてきたというわけか」

「それで今日も呑気にびゅっびゅしに来たのか？」

「私 came ヨトにも気付かないほど夢中でオカズに顔をうずめていたようだが」

「ニオイが好きなのか？ 女の子のニオイに興奮するののか？」

「今日は何の匂いをオカズにびゅっびゅするつもりだったんだ？」

「右手に持ってるカルパッチョのブラウスか？」

「それとも左手に持ってるペパロニのタイツか？」

「ニオイはタイツの方がキツそうだが……臭いのが好きなのか？」

「この間は私のタイツだったものなあ？」

「私のタイツのニオイを嗅ぎながら こんな状況でもまだ治まらないその丸出しの勃起汚ちんぽカキまくって くっさい汚汁びゅっびゅしたんだろ？」

「この変態がつっ！」

「本当なら警察に突き出して学校にも報告してやるところだが……」

「まあ大人しく私の言うコトに従うというのなら

この件は見逃してやらんコトもないぞ」

「安心しろ 変態のお前にしたらそんなに悪い話でもないはずだ」

「よし 賢い選択だ」

「だがまあその前に……やはり多少の罰は与えんとな」

「女性のニオイに興味があるようだが……そうだな」

「お前には本当の女のニオイがどういうモノか思い知らせてやる」

「二度と女のニオイで勃起なんぞ出来んようになるかもしれんがな……フッフ」



「タイツにご執心だったようだから。。。やっぱりここか？」

「まだ直接嗅いだヨトはないんだらう？」

「いつものような残り香とはニオイの濃さが比較にならないんだらうからな」

「現実を思い知るにはちやうど良いだらう」

「どうした？ 嗅ぎたかったんだらう？ 好きなだけ嗅いでイイんだぞ？」

「フフツ どうだ？ 臭いか？ 臭いだらう？」

「私は結構な脂足なんだ その上タイツを履いてるせいで堪らなく蒸れてな

毎日今くらいの時間には人前で靴を脱ぐのも憚られるほどの臭気を放つ始末だ」

「実はちよっとしたコンプレックスだったんだがなあ。。。」

「まあいい それにまだまだこんなモンじゃないからな」



「タイツも脱いで直接嗅がせてやるう」

「もう遮る物は無いからな ニオイも一段と強くなっただろう？」

「女子は校則でタイツ着用が決まりだからな どう足掻いてもムレからは逃れられん」

「どんなに綺麗で澄ました顔をしてても

我が校の女子はみんな足元に汚臭を漂わせてるんだ」

「お前にとっては天国かもな」

「まあ お次のコレに耐えられるなら……だがな」



「ほおら 開くぞお。。。」

「これならどうだ？ 今日一日かけてたっぷり蒸らした足だからな」

「そうとうニオイはキツイはずだが？」

「どうした？ 泣いているのか？ 涙が出てるぞ」

「あまりの臭気で目にしみたか？」

くっぴゅ

「それとも女の子の本気臭を生で嗅げたヨトが
そんなに嬉しかったか？」

「どうやら後者の方か。。。」

「これほどキツイ汚臭を嗅がされて萎えるどころか
さらに怒張を増すとは。。。」

「どうやらホンモノのド変態だったようだな」

「ほらっ立て！」

「亀さんがパツツンパツツンのテクンテクンじゃないか」

「そんなに私の足のニオイが良かったか？」

「蒸れに蒸れたくっさい足のニオイに興奮したのか？」

「いったい何食って育ったらこんな臭い足のニオイを無理矢理嗅がされて
ちんぽ勃起させるような人間に仕上がるんだ？」

「お前のママもこんな変態を育てるためにミルクを与えてたわけでもないだろうに」
「ん？ どうした？ 何をそんなにプルプル震えて・・・」





!!

いもうと

お兄ちゃん

「貴様。。。正気か？」

「この程度で汚射精とは。。。そうとうなきかん坊。。。いや棒だな」

「まあ一人お楽しみのお預けをくらってたからな」

「早く射精したくてもう限界だったか」

「しかし。。。私の足をこんなモノでドロドロに汚すなんて」

「やるコトは分かっているな？」



「お前が自分で汚したんだからな ちゃんと自分で汚掃除するんだ」

「ほら全部キレイに舐め取れ」

「私の足が舐められるんだぞ？ 嬉しいだろ？」

「指の一本一本も丁寧に 又のところもしっかりと舐めるんだ」

「お前の汚汁だけじゃなく私の足の味もするか？
ねっとりしよっぱく濃いだろ？」

「味がなくなるまでしっかりとしゃぶり尽くせ」

「よし そのくらいで良いだろう こっちへ来い」



「お前のも汚れただる？」

「お前のヨレも相当臭いぞ？ お風呂でちゃんと剥き洗いしてるのか？」
「まあ安心しろ 今日特別に私が纏めて汚掃除してやる」

くんか
くんか
くんか

「にしても・・・さっきびゅっびゅしたばかりなのに
もうパツパツじゃないか」

「私の足を舐めながらまた興奮してたのか 変態め」



「まず中に残ったのをちゃんと全部吸い出してやるからな」
「後で貼り付いたチンカスも全部キレイにこそぎ落としてやる」
「どうした？ そんなビクビクして」
「出したばかりで三擦り半か？」
「まさかそんなわけ。。。んっ!!」

「んんっ!!!」

びるびる
くさくさ

びるびる





「んぐっんぐっ...」

んぐっんぐっ

「いきなり奥まで突っ込んで汚射精とは……」

「ほとんど飲み込んでしまったじゃないか」

「ダメって勝手にびゅっびゅするなんて……そんなに飲ませたかったのか？」

「言ってくれればちゃんと全部飲んでやったものを」

「しかしこんな勝手に許されると思ったのか？」

「お前はまだ立場が分かってないようだな」

「更なるお仕置きが必要か……」

「これ以上やる気はなかったが仕方ない 悪さををしたお前が悪いんだからな？」

「さあ来い……お前の嗅覚を壊してやる」

はあ
はあ

はあ
はあ

どろたん

「さあ 女の子が一番臭がれてはイケナ場所だ」
「こんなコトになるなんて思ってなかったからな」
「当然、昨日から洗ってない汚れを溜め込んだムレムレ汚マンショだ」
「変態のお前にとってはむしろ望むところだとか思ってそうだが……」
「はたして現実に蔓延るこの女の子の惨状を目の当たりにして
最後まで耐え抜くコトができるかな？」

「女の陰部は男よりも汚れやすく、すぐ臭くなるからな」

「経血やらオリモノやら年中何かしらの分泌物が溢れてムレて……」

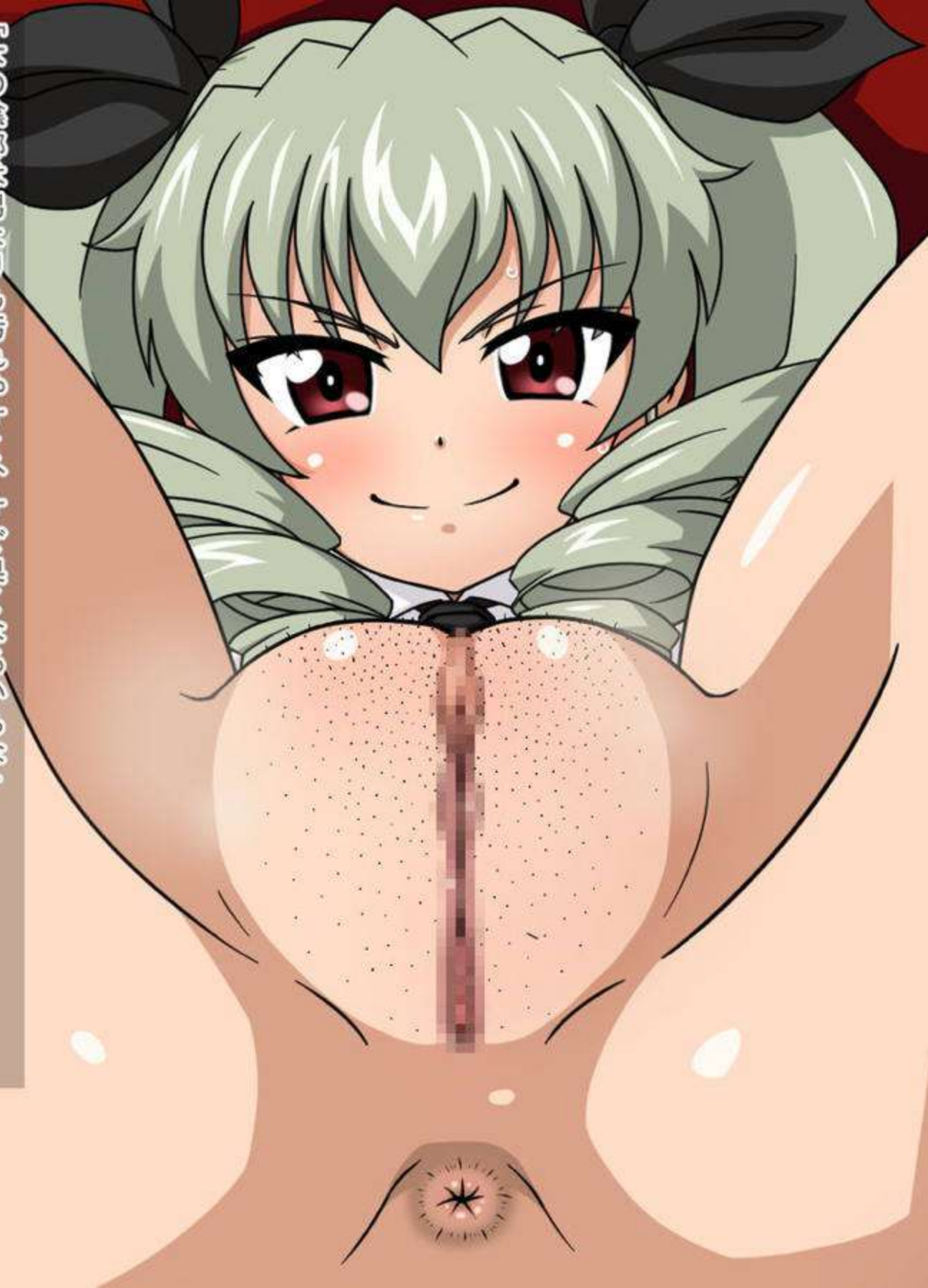
「制服のスカート程度じゃ、ちよつとした動きで中に籠った臭気が拡散されて
周りの人間に気づかれるコトもあるくらい汚臭を放ってるんだぞ」

「もしかしたらお前も既に嗅いだコトがあるかもしれないなあ」

「まあ、変態童貞のお前にはそんなニオイが漂ってきたところで
それが汚まんこのニオイだなんて知る由もなかっただろうがな」

「後になって気付く中高童貞男子あるあるだ 知らんけど」

「さあ 開いてやるからしっぴかり嗅ぐんだぞ」



「どうだ？　すごいだろう？　コレが女のニオイだ・・・」
「開いた瞬間、奥に籠った生臭くて酸っぱい発酵臭が爆散したたる？」
「汚まんこカスもいっぱい溜まって・・・」
「洗ってない女の汚マ○コなんて常に大惨事だからな」

「どうした？　さすがのお前もえすいたのか？」
「今度は鼻水まで垂らして本気泣きじゃないか」
「女の子に対してさすがにそれは失礼なんじゃないか？」
「だが　そんなに酷いのならお前に汚掃除をしてもらおうとするか」
「私に無断であんな臭い汚汁を飲ませたんだ　このくらいできるよな？」

あ
い
は
し
ょ



「舐め取った汚まんこカスはちゃんと全部食うんだぞ？」
「ネチネチと噛み締め、味わってから全部飲み込むんだ」
「ほら食えっ この世界で私にしか作れない最高の珍味なんだからな」
「原材料はアンチヨビ100%だ」

「クリトリスも皮を剥いて内側までしっかりキレイにしろ」
「男と一緒に女も包茎クリちんぽには、いっぱい恥垢を溜め込んでるだぞ」
「どうだ？ うまいか？ うまいだろう？ ニオイにも馴れてきたようだな」
「だったら食え！ もっと食え！ ほら食えっ！」

「あぁっ・・・もう辛抱たまらんっ！」
「汚まんこ汚掃除クンニでイクうう！」

「臭い汚まんこ舐められてイクううっ！」
「汚まんこカス食べられてイクううううっ！」



「汚まんこ汚食事クンニでイっクううっ!!」



ビクッ!

ビクッ!



「うまかったか？ そうか」

「始めはあれほど嫌がってたのに最後は夢中になって貪りついてたな」

「結果的にはお仕置きにならなかったが・・・」

「しかしおかげでココはキレイになったな」

「さあ次はお前がこっちに座れ」

「今のでいっきに体温が上がって身体が火照って汗が滲み出てきたぞ」
「私の体臭もさらに匂い立ってきたんじゃないか？」
「どうだ？ イイ匂いか？」

「汚ちんぽがまたピクピク反応してるぞ？」
「ほら ここなんかどうだ？」



「腋だ どうだ？ 匂うか？」

「今日はこれ以外にもいっぱい汗をかいていたからな」

「もともと腋汗をかきやすい体質でもあるから
なかなか酸っぱく仕上がってると思うぞ」

「そら 胸いっぱい吸い込め 私をお前の中に取り込め」

「身体の中を私の匂いで満すんだ」

「汚まんこの匂いがイケる今ならもう腋のニオイなんか
ただのご褒美でしかないだろう？」

「汚掃除を頑張ったご褒美だ 思う存分堪能すればいい」

「もっとクンクン嗅ぎたおせ」

「腋のニオイを嗅いでまた大きくしたな」
「汚股の下からグイグイ押し上げてきてるじゃないか」
「そんなに私の腋の匂いが良かったか？」

「まだ汚ちんぽの掃除が終わってなかったな」
「特別にお前がキレイにしてくれた汚まんこで汚ちんぽ掃除の続きをしてやる」
「しっかり擦ってお前のもキレイにしてやるからな」





「まずは先っぽを。。。ほら、入れるぞお。。。」
「こんなデカ汚ちんぽは私も初めてだからな。。。
ゆっくりと入れてイキたいところ。。。」
「だが。。。このまま一気に奥までっ！」

「はいたたあ！」

「ああっ。。。やはりデカいな。。。奥までミチミチに埋められて。。。」

「どうだ？ 私の汚まんこの汚肉は 気持ち良いか？」

「それじゃ動くぞ」

「私の汚肉のヒダでお前の汚ちんぽカスを全部キレイに擦り落としてやるからな」

ズググググ

「ああ。。。引き抜く度に子宮まで引き摺り出されそうなくらい
ぢゅっぽり吸い付いてるぞ」

「おかげで出し入れする度に下品な音が鳴ってしまっじゃないか」

「オナラじゃないからな オナラじゃないんだからな！」
「中の空気が抜けてさらに吸い付きが強く。。。っ」
「スゴイな。。。気持ち良いトヨ全部にゴリゴリ当たる！」



「どうした？ もうイキそうなのか？」

「お前は本当に早漏だな。。。」

「仕方ない いつでもスキにイケばいい。。。」

「どうやら私も。。。人のヨトは言えんようだからな。。。」

「ここからはさらに激しくイクぞー！」

「お前が無様にびゅっびゅするまでシゴキたおしてやるっ！」

ズ
ズ

ズ
ズ



「ほら腋の匂いももっと嗅げ！」
「ああっ！ 汚ちんぽがさらにビクビクと反応してるぞー！」
「イクのか？ 私の腋の匂いでイクのか？」
「そうかならイケっ！ イケっ！！」
「私の腋の匂いを嗅ぎながらイケっ！！」
「私の匂いに溺れてイケっ！！」



ク
ク

ク
ク

ど
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ

ど
ろ
ろ
ろ
ろ
ろ

ク
ク

「スゴイな。。。まだ出ているのか？」
「散々びゅっびゅしたクセにまだこの量とは。。。」
「しかし早漏具合は酷いモノだがこの装弾速度なら問題なくイケそうだな」
「なかなか使えそうで安心したぞ」
「ん？ああ そうか まだ言っでなかったな」



びゅっ
びゅっ
びゅっ

「これからお前の身体は戦車道の軍資金稼ぎに使わせてもらおうぞ」

「全国の戦車女子を相手に客をとってもらう」

「どうだ？　ここぞこせせと汚汁びゅっぴゅ出来るんだ
悪い話じゃないだろ？」

「安心しろ　客は私が見つけてやる」

「お前は各校回って出来る限りの金と情報を集めてこい」

「まずはダーズリンさんあたりがイイか……」

「この間　好きに弄れる従順な犬が欲しいって言ってたしな」

「ふふっ……しっかり稼いでくれよ」

完









































































「さあ 女の子が一番臭がれてはイケナ場所だ」
「こんなコトになるなんて思ってなかったからな」
「当然、昨日から洗ってない汚れを溜め込んだムレムレ汚マンショだ」
「変態のお前にとってはむしろ望むところだとか思ってそうだが……」
「はたして現実に蔓延るこの女の子の惨状を目の当たりにして
最後まで耐え抜くコトができるかな？」

「女の陰部は男よりも汚れやすく、すぐ臭くなるからな」
「経血やらオリモノやら年中何かしらの分泌物が溢れてムレて……」
「制服のスカート程度じゃ、ちよつとした動きで中に籠った臭気が拡散されて
周りの人間に気づかれるコトもあるくらい汚臭を放ってるんだぞ」
「もしかしたらお前も既に嗅いだコトがあるかもしれないなあ」
「まあ、変態童貞のお前にはそんなニオイが漂ってきたところで
それが汚まんこのニオイだなんて知る由もなかっただろうがな」
「後になって気付く中高童貞男子あるあるだ 知らんけど」
「さあ 開いてやるからしっぴかり嗅ぐんだぞ」



「どうだ？　すごいだろう？　コレが女のニオイだ・・・」
「開いた瞬間、奥に籠った生臭くて酸っぱい発酵臭が爆散したたる？」
「汚まんこカスもいっぱい溜まって・・・」
「洗ってない女の汚マ○コなんて常に大惨事だからな」

「どうした？　さすがのお前もえすいたのか？」
「今度は鼻水まで垂らして本気泣きじゃないか」
「女の子に対してさすがにそれは失礼なんじゃないか？」
「だが　そんなに酷いのならお前に汚掃除をしてもらおうとするか」
「私に無断であんな臭い汚汁を飲ませたんだ　このくらいできるよな？」

あ
は
は
は





「舐め取った汚まんこカスはちゃんと全部食うんだぞ？」
「ネチネチと噛み締め、味わってから全部飲み込むんだ」
「ほら食えっ この世界で私にしか作れない最高の珍味なんだからな」
「原材料はアンチヨビ100%だ」

「クリトリスも皮を剥いて内側までしっかりキレイにしろ」
「男と一緒に女も包茎クリちんぽには、いっぱい恥垢を溜め込んでるだぞ」
「どうだ？ うまいか？ うまいだろう？ ニオイにも馴れてきたようだな」
「だったら食え！ もっと食え！ ほら食えっ！」

「あぁっ・・・もう辛抱たまらんっ！」
「汚まんこ汚掃除クンニでイクうう！」

「臭い汚まんこ舐められてイクううっ！」
「汚まんこカス食べられてイクううううっ！」





「汚まんこ汚食事クンニでイっクううっ!!」

ビクッ!

ビクッ!



「うまかったか？ そうか」

「始めはあれほど嫌がってたのに最後は夢中になって貪りついてたな」

「結果的にはお仕置きにならなかったが・・・」

「しかしおかげでココはキレイになったな」

「さあ次はお前がこっちに座れ」

「今のでいっきに体温が上がって身体が火照って汗が滲み出てきたぞ」
「私の体臭もさらに匂い立ってきたんじゃないか？」
「どうだ？ イイ匂いか？」

「汚ちんぽがまたピクピク反応してるぞ？」
「ほら ここなんかどうだ？」



「腋だ どうだ？ 匂うか？」

「今日はこれ以外にもいっぱい汗をかいていたからな」

「もともと腋汗をかきやすい体質でもあるから
なかなか酸っぱく仕上がってると思うぞ」

「そら 胸いっぱい吸い込め 私をお前の中に取り込め」

「身体の中を私の匂いで満すんだ」

「汚まんこの匂いがイケる今ならもう腋のニオイなんか
ただのご褒美でしかないだろう？」

「汚掃除を頑張ったご褒美だ 思う存分堪能すればいい」

「もっとクンクン嗅ぎたおせ」

「腋のニオイを嗅いでまた大きくしたな」
「汚股の下からグイグイ押し上げてきてるじゃないか」
「そんなに私の腋の匂いが良かったか？」

「まだ汚ちんぽの掃除が終わってなかったな」
「特別にお前がキレイにしてくれた汚まんこで汚ちんぽ掃除の続きをしてやる」
「しっかり擦ってお前のもキレイにしてやるからな」





「まずは先っぽを。。。ほら、入れるぞお。。。」
「こんなデカ汚ちんぽは私も初めてだからな。。。
ゆっくりと入れてイキたいところ。。。」
「だが。。。このまま一気に奥までっ！」

「はいたたあ！」

「ああつ……。やはりデカいな……。奥までミチミチに埋められて……」

「どうだ？ 私の汚まんこの汚肉は 気持ち良いか？」

「それじゃ動くぞ」

「私の汚肉のヒダでお前の汚ちんぽカスを全部キレイに擦り落としてやるからな」

ズググググ

「ああ。。。引き抜く度に子宮まで引き摺り出されそうなくらい
ぢゅっぽり吸い付いてるぞ」

「おかげで出し入れする度に下品な音が鳴ってしまっじゃないか」

「オナラじゃないからな オナラじゃないんだからな！」
「中の空気が抜けてさらに吸い付きが強く。。。っ」
「スゴイな。。。気持ち良いトヨ全部にゴリゴリ当たる！」



「どうした？ もうイキそうなのか？」

「お前は本当に早漏だな。。。」

「仕方ない いつでもスキにイケばいい。。。」

「どうやら私も。。。人のヨトは言えんようだからな。。。」

「ここからはさらに激しくイクぞー！」

「お前が無様にびゅっびゅするまでシゴキたおしてやるっ！」

ズ
ズ

ズ
ズ



「ほら腋の匂いももっと嗅げ！」
「ああっ！ 汚ちんぽがさらにビクビクと反応してるぞー！」
「イクのか？ 私の腋の匂いでイクのか？」
「そうかならイケっ！ イケっ！！」
「私の腋の匂いを嗅ぎながらイケっ！！」
「私の匂いに溺れてイケっ！！」



ピク
ピク

ピク
ピク

どろ
どろ

びしょ
びしょ

びしょ



「スゴイな。。。まだ出ているのか？」
「散々びゅっびゅしたクセにまだこの量とは。。。」
「しかし早漏具合は酷いモノだがこの装弾速度なら問題なくイケそうだな」
「なかなか使えそうで安心したぞ」
「ん？ああ そうか まだ言っでなかったな」

びしょ
びしょ
びしょ

「これからお前の身体は戦車道の軍資金稼ぎに使わせてもらおうぞ」

「全国の戦車女子を相手に客をとってもらう」

「どうだ？　ここぞこせせと汚汁びゅっぴゅ出来るんだ
悪い話じゃないだろ？」

「安心しろ　客は私が見つけてやる」

「お前は各校回って出来る限りの金と情報を集めてこい」

「まずはダーズリンさんあたりがイイか……」

「この間　好きに弄れる従順な犬が欲しいって言ってたしな」

「ふふっ……しっかり稼いでくれよ」

完





































